

FIT チャリティ・ラン 支援先団体インタビュー

第1回 (全2回)

FIT チャリティ・ラン 2016 実行委員会

地域に根ざした、社会的に意義ある活動をしているものの、認知度等の問題により十分な活動資金を確保できていない団体への寄付を通して社会貢献を行っている FIT チャリティ・ラン (英名: Financial Industry in Tokyo For Charity Run)。2016 年の実行委員会では、前年の支援先 6 団体にインタビューをしました。非営利団体で活動している「人」に焦点を当て、どのような思いで団体を設立・運営し、どのような経験をし、どのような人々が集まって団体としての活動を行っているのかということを中心にお話を伺っています。活動をされている「人」の生の声を通して、決して特別なわけではない個人が、いかに社会的インパクトを与えるような活動をしているのか。「私たちに何ができるのか?」といったことを考えるきっかけの一つとしていただければ幸いです。

第1回

特定非営利活動法人 ReBit

代表理事 薬師実芳様

「特定非営利活動法人 ReBit」は 2009 年から「LGBT を含めた全ての子どもがりのままで大人になれる社会」を目指している団体です。第二次性徴期と呼ばれる心も体も発達する繊細なステージにいる小学校高学年～高校生を主とした子どもや若者に向けたサポートを行っています。

<https://www.facebook.com/Re.Bit.LGBT/>



(左から) Tae Ahn (FIT 2016 広報チーム副実行委員長)、薬師さん (ReBit 代表理事)、木村ちあき、嶋倫子 (FIT 2016 広報チーム)

FIT: ReBit を立ち上げた経緯を教えてください

薬師: 大学 2 年時に所属していたイベントを企画するサークルで LGBT をテーマにしたイベントを企画した際にとても反響が良く、そのメンバーたちと ReBit の前身となる「早稲田大学公認学生団体 Re:Bit」を立ち上げました。

FIT: ReBit さんはどういう団体ですか

薬師: 「LGBT を含めたすべての子どもが、ありのまま大人になれる社会へ」をスローガンとし、主に小学校高学年～高校生、いわゆる二次性徴期と呼ばれる心も体も発達する繊細なステージにいる子どもたちに注目しています。LGBT をサポートしている団体としては唯一、子ども+若者を主なターゲットとし、大学生や 20 代が運営している珍しい団体です。

主に 3 つの事業に取り組んでおり、LGBT 教育や、着たいものを着て参加できる LGBT 成人式、さらには LGBT に向けたキャリア支援などを行っ

ています。

FIT: 活動を開始された当初は困難なことが多かったのではないのでしょうか

薬師: LGBT について学校で出張授業を始めた際、約 100 校にアプローチしましたが、「そんな性的な話はできない」「LGBT の話を聞かせたら学校の子もたちまで LGBT になってしまう」「うちの学校にはそんな子たちはいません」などと講演を断られました。しかし、これらは誤解であり、LGBT は約 13 人に 1 人、40 人のクラスであれば約 3 人は LGBT だと考えられるのです。

2015 年 4 月に文部科学省が性同一性障害や性的マイノリティの児童生徒へ配慮を求める通知を全国の小中高校などへ配布したこともあり、現在では LGBT の課題は教育現場の人権課題であることが少しずつ認知されつつあります。学校の先生方に LGBT について知っていただき、児童・生徒に授業を通じて知識を提供するための教材「Safespace キット (仮)」を 2016 年度内にリリースできるよう準備しています。

FIT: 今の日本でカミングアウトすることについてどうお考えですか

薬師: 子どもたちにとっての居場所は主に家か学校に限られます。学校でカミングアウトをした場合、理解を得られないといじめ等につながる場合もあります。家族にカミングアウトをした場合、受け入れられないと家にいられなくなる場合もあります。居場所事態が無くなってしまいかも…という不安と恐怖から、なかなか自分の保護者にも打ち明けられない子たちは大勢います。自分の居場所がなくなると、彼らは生存危機にさらされてしまうので、誰に打ち明けるにも覚悟が必要になっている現状です。

FIT: 活動を続けていく原動力は何でしょうか

薬師：メンバーやイベントに参加していただく方には LGBT の大学生が多く、ReBit に参加する数年間でたくさんの変化や成長があり、それらを間近で感じられることが嬉しいです。例えば、数年前は「カミングアウトしても受け入れられないだろう」と悩んでいた学生が数年後には、同じような悩みをもった後輩にアドバイスをしている姿を見ると、色々な壁を乗り越えたのだなあと感じます。また、就職活動の支援をした学生からの内定報告をもらう時も本当に嬉しいです。逆に、出張授業の終わりに、私だけにこっそり「今まで誰にも言えなかったんだけど、実は…」と自分のセクシュアリティを打ち明けてくれる子どもたちが大勢いるので、もっともっと頑張らねばと身が引き締まります。

FIT：LGBT でない人は ReBit さんのような団体にどのようなお手伝いができますか

薬師：この記事に目を通してくださったりして、興味を持って頂けるだけで嬉しいです。弊団体にプロボノとして参加している方は LGBT でない方も多く、ご自分の専門性を活かし ReBit の運営や様々なプロジェクトに携わっていただいています。これは非常にありがたいです。数年前、ニューヨークの LGBT 団体ヘスタディツアーに行かせていただいた際、「LGBT は約 13 人に 1 人で少数派だけど、その友人や家族を含めるとマジョリティだ。一緒にやるから社会が変わる」と LGBT アライ（＝LGBT を応援する人）の職員さんに教えていただいたことがあります。セクシュアリティに関わらず、共に参加できるコミュニティでありたいと強く思っています。

FIT：FIT チャリティ・ランに参加する方々をはじめ、皆さんにメッセージをお願いします

薬師：弊団体をご支援いただき本当にありがとうございます。今後も定期的に講演会やイベントを開催しますので、ぜひお時間のある時にご参加いただくと嬉しいです。

LGBT は見た目ではわかりませんが、同様に LGBT を応援したい気持ちも見た目ではわかりません。ReBit の SNS では LGBT のニュースについても発信していますので、肯定的にシェアをしていただくことで、あなたの周りの約 13 人に 1 人にとっても、心強いメッセージになると思います。

第 2 回 NPO 法人発達わんぱく会

団体代表 小田知宏様
浦安駅前校教室長 田中寿子様

「NPO 法人発達わんぱく会」は「こころとことばの教室こっこ」を運営し、発達障害またはその疑いのある子どもを対象とした児童発達支援事業を行っている団体です。こっこ浦安駅前校の教室は二部屋に仕切られ、子ども達の様子を親が隣の部屋からマジックミラー越しに見られるような仕組みになっています。子ども達は伸び伸びと過ごし、親御さんも安心して見守っている様子が伺えました。



Tae Ahn (FIT 2016 広報チーム副実行委員長)、嶋倫子 (FIT 2016 広報チーム) とわんぱく会の田中さん、スタッフの方

FIT：発達わんぱく会を立ち上げた経緯を教えてください

小田：私自身は 42 歳で娘が二人います。大学卒業後は将来社長になりたいという思いでまずは丸紅に勤務し、その後、当時（1999 年）介護ビジネスが成長分野と考えコムスンに転職。障害者支援担当として、初めて発達障害の人と出会いました。みんな頭が良いのです。例えば、本を読むのがとても速く、目で見た情報を一気に脳が処理できる天才的な能力を持っている一方、耳から聞く言葉を理解することがとても苦手だった。おそらく、小中学校では先生からそんな特性は全く理解されず、社会不適應を起こして知的障害手帳を持っていたのです。「もし、幼児期にその特性が理解されていたら、すごい天才になっていたかもしれない」という人が何人もいました。でも 30 歳になった彼らに僕たちが福祉として関わっても何もしてあげられず、もし、その人たちと幼児期に出会っていたら、その人に僕たちが関われることはいっぱいあったらうし、その人の人生も全く違うものになっていただろうなと思ったことが、発達障害の幼児支援に関わる事業をすることにした一番の動機です。

FIT：「発達わんぱく会」と「こっこ」の名前の由来を教えてください

小田：発達障害の支援をしようと思ったので「発達」という言葉は入れたい、「わんぱく」は子どもの興味や主体性、やりたい気持ちを最大限尊重

し、大人が環境を整え、子どもは自由に伸び伸びと「わんぱく」に育てて欲しいという思いからです。一人の子どもの成長はみんなで支える、地域で支えるという意味で「会」をつけました。

「こころとことばの教室」は子どものどこを伸ばすか。人と関わりたいのは心だし、それを実現するのは言葉、心を伝える手段。それを伸ばしたいという気持ちでつけました。子どもに「心と言葉の教室に行きたい」と言わせるのは難しいので「こころとことば」の「こ」を取って「こっこ」にしました。

浦安の皆さんがその子を理解して支えていくことがゴールなので、株式会社ではなく NPO にしました。NPO は社会のものであり、それで街を変えていく、街づくりをしていく。発達障害の方が住みやすい街にする近道と思ったからです。

FIT：活動を続けていく原動力は何でしょうか

小田：子どもたちが、人と関わろうと思っている姿に成長を感じた時です。普通に字が書けるようになったという成長よりググッとくるのです。人との関わりが苦手なのに、僕にチョコレートをくれた子がいて。「あれ？そんなことできるの？」と思った瞬間とか。お母さんも不安で険しかった表情が、半年経つと変わってくる。いい表情だなど思う時です。あと、妻やスタッフも喜んで仕事に来てくれることです。子どもたちのためにも長く働ける職場づくりも大切です。今年の春は 16 人が入社しました。喜んで長く働くスタッフの存在もやりがいを感じさせてくれます。

FIT：田中さんご自身について聞かせてください

田中：私は元々浦安市の公務員で、保育士として 29 年間働いていました。その中で「はみ出しちゃうような子に対してどうしたらいいかな」という問題意識をもって、「お母さんたちの気持ちが分かるようになりたい」と思っていました。その後、保育園から転職し、そこで小田さんと出会い発達わんぱく会の事を知り、お仕事をさせていただくことになりました。「お母さん方と寄り添いたいな」と思いながらやっています。

FIT：田中さんが感じるやりがいは何でしょうか

田中：子どもたちの成長に寄り添っていられるというのが楽しいですね。お母さん方に笑顔が出てくることにとってもやりがいがあると思います。親が外に出て行かないと子どもが外に出られないので、親御さんがここまで来てくれてありがとう

という気持ちになります。お母さんの笑顔が変わってくると子どもも変わるので、そういうシーンをいっぱい見たいです。

FIT：発達障害の子どもと接している中で一番難しいことは何でしょうか。また、それに対してどのように取り組んでいますか

田中：どうやったらその子を理解し、良い方向に進めるのか、それをどう手助けするかが難しいですね。人間は機械ではないので、その子自身を大事にしながらというのが難しいです。

FIT：発達障害の子どもと接する機会の少ない人は、どのように対応したら良いですか

田中：やっぱり戸惑いますよね。大声を出したり、一人で喋っているのを見ても、それをわかってもらうには時間がかかりますし。色々な人がいるので、決めつけないで欲しいなと思います。親のせいだなんて言われたりすると、親御さんが外に出たくなってしまいますので、「色々な人がいて当たり前」ということが広く伝わっていくと良いのかなと思います。

FIT：FIT チャリティ・ランに参加する方々をはじめ、皆さんにメッセージをお願いします

田中：FIT の方々が来て、私たちの活動を見られることが嬉しいですね。寄付金を頂けるのも当然嬉しいですが目指している社会はお金だけではなく、一人ひとりの理解です。こういう顔合わせができる機会がありがたいです。

第 3 回 公益社団法人 ア・ドリーム・ア・デイ IN TOKYO

マネージング・ディレクター 津田和泉様

「ホスピタリティ・ゲストハウス公益社団法人ア・ドリーム・ア・デイ IN TOKYO」は、難病を抱える子どもたちとご家族の思い出作りを支援している団体です。東京ディズニーリゾートをはじめとする、楽しく新しい体験ができるような施設を訪れるツアーを子どもたちやご家族のご希望に沿ってテラーメイドで作り上げ、難病と闘うお子さんとご家族にとっての夢の実現をお手伝いされています。

www.guesthouse.or.jp



Tae Ahn (FIT 2016 広報チーム副実行委員長)、ア・ドリーム ア・デイ IN TOKYO 津田和泉さん

FIT：活動を始められた経緯を教えてください

津田：以前は経済団体に勤務しながら、企業のCSR活動に関わる政策提言の準備や関連リサーチ、第三者として様々なNPO団体のサポートをしていました。お手伝いをする中で、もっと自分に来ることはないか、運営する当事者になってみたい、自分自身が生き生きと働ける場所はないかと考えてきました。「ホスピタリティ・ゲストハウス公益社団法人ア・ドリーム・ア・デイ IN TOKYO」とはその当時からの付き合いで、事業運営にお誘い頂いてから約2年が経ちますが、思い切って飛び込んで本当に良かったと思っています。

実務を取り仕切る常勤スタッフが私一名という小さな所帯ですが、企業ボランティア、医療セクターの方々など、多くのサポーターに支えられながら、自分自身が充実して仕事を出来ています。

FIT：どんな活動をされていますか

津田：団体の設立から9年が経ちますが、年間約10名のお子さんとそのご家族をお手伝いしています。難病児とそのご家族にとっては、飛行機に乗るために救急救命士の同伴や緊急の際の医療機関のサポートが必要なだけでなく、そもそも外出自体も難しいケースが多く、「東京ディズニーランドに行く」という夢の実現には、私たちが想像出来ないほどのハードルが待ち構えています。旅行の準備も一年がかりになることが常ですが、ご自宅への訪問や医師との打ち合わせ、特別車両の手配など、ご家族と関係者が一丸となって夢の実現に向けてひとつずつ準備をしていきます。それでも、お子さんの健康状態が急変してしまったり、一番辛いケースでは東京へ迎えられないことも少なからずあります。

FIT：辛い場面も多いかもしれませんが、活動を続けていく原動力は何でしょうか

津田：夢が実現する瞬間に立ち会うまでは本当に大変です。ただ、夢に見た旅行が出来ると、お子さんが動かせないはずの手足を動かして楽しんだり、ご家族でも見たことがないような笑顔を浮かべることがあります。その姿を見ていつも献身的に支えていらっしゃるお母様が涙されることもあり、私もボランティアもむしろ喜びを分けてもらっています。お子さんとご家族の皆さんの明るい姿が一番の原動力です。私自身が本当に嬉しくなるし、いつも元気をもらっています。

FIT：今後の展望をどのように考えていますか

津田：約10年の活動を経て、徐々に団体としての基盤が出来てきました。難病を抱えるお子さんには十分なケアが必要で、毎回の旅行はゼロから作り上げるテラーメイドになりますので、簡単に支援人数の拡大は出来ません。でも、少しずつノウハウを確立しながら、この活動を広げていくステージに来ていると感じています。何より、夢の実現やご家族にとってのかけがえのない思い出作りのお手伝いができることはとても楽しいです。もっと沢山の方に知って頂きたいです。

FIT：津田さんご自身としては、今後どんなことをしていきたいですか

津田：この仕事がとても楽しく、もっともっと精神的に頑張るつもりです。これからは、団体自体をひとつの組織としてマネジメントする体制も整えながら、この活動をより大きくしていきたいです。また、活動内容が似ているNPO団体の方々との横のつながりも大切にしていきたいです。セミナーやイベントと一緒に企画・実施したり、新しいアイデアを頂いたりすることも増えてきましたが、新しい気づきや出会いを楽しんでいきたいです。

FIT：活動を続けていく上で、どんな人が向いていると思われますか

津田：重い病氣と闘う子どもたちと向き合うので、「命」を意識することが多いです。良い意味で深く考え込まずに、おおらかに色々なことを楽しめるような方が向いているかもしれません。団体としての課題もまだ沢山あり、やるべきことは山積みです。だからこそ、実務の中では前向きに生き生きと楽しみながら仕事をしていきたいです。

FIT：FITチャリティ・ランに参加する方々をはじめ、皆さんにメッセージをお願いします

津田：私は、ひとりきりで抱え込んでしまわないよう、他の団体や企業の方々と積極的にコミュニケーションを取っていますが、新しいネットワークの中で気付けることが本当に沢山あります。FIT 2015の他の支援先団体の方々とも情報交換をしたり、色々な悩みを話し合ったりすることが出来て、私自身のモチベーションにも繋がっています。今後も色々な方に関心を持って頂けると嬉しいです。

(FIT ホームページ fitforcharity.org)